

早稲田大学審査学位論文
博士(人間科学)

概要書

玉座の「カタ」と「カタチ」
- メソポタミアの紀元前3千年紀における玉座の研究 -

“Kata” and “Katachi” of the Throne
Study of the Throne in the 3rd Millennium B.C. in the Mesopotamia

2011年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

服部 等作
HATTORI TOSAKU

本論文の概要と構成

本論考は、メソポタミア文明初期においてシュメール文化が成熟した紀元前3千年紀(紀元前3000~2001年)に発展する玉座について、とくに「カタ：姿勢」と「カタチ：形態」の二要素に着目し、その歴史的・社会的・象徴的な発展・変容過程を文献、図像資料に基づく検討内容である。

本論考の第1章は、まず玉座がどのようなものかを、東-西アジア世界の代表例として天平時代の御椅子(赤漆欄木胡牀)とアケメネス朝ペルシャ・ダレイオス一世の玉座をあげた。

前者は、「胡」がつく名称から漢代以降に中国以外の民族、地域や文化の意味に用い、特に椅子は西域よりもたらされ「胡牀」と称された。とすれば、椅子として唯一の国宝である正倉院の胡牀が西域と縁ある点に疑いなく、実際に正倉院の胡牀とダレイオスの玉座の「カタチ」が四脚の支持構造や背板(凭掛・よりかかり)をもつ点で共通している。だが、その座法となる姿勢の「カタ」が異なり、前者が座面に胡座(あぐら)か平座の座法をとるのに対し、後者のそれが足をたらず垂足而坐で背板に身をよせる倚座の姿勢である。この相違点が何に由来するかは定かでないが、前者が明治時代に修復を経たものの、当初の原型を保っているのに対し、後者の原型は浮き彫りのみ残っているにすぎない。総じて古代の玉座は、人為的破壊と経年変化ゆえにその現存例がほとんどなく、それに関するまとまった記録と研究が見あたらない。このため玉座の研究を困難なもの、未開拓な状況にしている所以である。

こうした資料上の欠点を補うために、玉座に関する用語を定義し、時間(古代-現代)と空間(西-東アジア世界)において玉座に対する異なる意識の理解が必要となる。

第1章 玉座の「カタ」と「カタチ」

第1章では象形(甲骨)文字に着目する。たとえば、「座」と「倚」の象形は、他の姿勢を表す文字・語形と並び玉座を考察する上で特に重要となる。すなわち、象形の「坐」(坐・座)は、神に伺いをたてるため向き合う二人が低い平座姿勢を象ったものであり、神に伺う神聖な(訴訟)場の座姿勢の象徴的表現である。一方、「倚」(倚)の象形は、人をあらわす偏に大刀を添えた形で権力を象徴する語形であり、刀や玉座に「身をよせる」姿勢を表していることが明らかである。むろん権力を象徴するには、玉座の座面(席)や背板、肘当て、足台ならびに王杖(太刀・槍、戈、楯)、王冠といった威儀具(宝器)を必要とし、さらにそこには象徴的な姿勢の「カタ」と玉座の「カタチ」が不可欠となる。ここに象形の初義と初形は、玉座でとるべき姿勢と形態的側面からの考察に文字の体系として重要な役割を担っている。

玉座をとりあげた考古学発掘例は少なからずあるものの、その多くは「カタチ」を重視するあまり、「カタ」の言及がほとんどない。たとえば新石器時代の代表的な遺構出土品にチャタル・フュックの地母神座像の不十分な検討例をはじめ、後のエジプト・ツタンカーメン王の玉座、新アッシリア帝国の玉座があるが、研究の大半が玉座につく人物がとる姿勢の「カタ」を見逃し、「豪華な椅子=玉座」の「カタチ」とする偏った物質文明観に陥っている。

第1章ではまた、仮説として、玉座の「カタチ」のみならず、玉座が神(天)に通じるよう高いところから下を見下すため座姿勢の「カタ」が不可欠とする。この仮説に基づけば、メソポタミアは、生活の基本に信仰があり、神に近づくため天を指向した神殿建築を進め、神殿内部の玉座にも同じ指向をもつ「カタ」と「カタチ」を求めたとする。

仮説の検証方法として、(円筒)印章を初め座像の造形表現を検討した。述べるまでもなく、印章は前4千年紀中頃から原形が登場し、メソポタミアを中心に長期間かつ広域的に継続して大量使用をみた。もともと、印章が計数の手段として当初より利用された。次第に豊富な図像が加わり生活光景、特別な王や神の座像や立像、饗宴、動物闘争、神話主題、さらには王の謁見する玉座像を表わす。後に楔形文字の発展に伴って銘文が加わるため印章は、玉座の発展過程と登場人物や神、信仰の様子など玉座に関する多彩な情報を提供する文献に匹敵する資料となる。加えてメソポタミアは、人類がアフリカを出て各地に拡散する必然的経由地であり、この地でシュメール人が世界最古の文明のもと王権と玉座の発展要素が時間(前3000年紀)、空間(メソポタミアー西アジア)、人間(王権、玉座の主人公)を見いだせる。

第2章 姿勢と形態的研究

第2章では、メソポタミアの時代を約500年毎に区分する編年方式(Collon, D. 1987)のもと、前3千年紀の1から3期に登場する座像とともに玉座の図像の変遷について、具体的な印章の図像例をあげ、同時期の彫刻、工芸、壁画などの美術と比較しつつ考察をすすめている。

まず、1期(前3千年紀初頭以前)は経済活動が都市に集まる初期的な国家の形成をみた時代で、印章にもその活発な活動を反映して単独ないし群像の座像表現が登場する。また都市にも高層化をめざす神殿の塔(ジグラット・Ziggurat)と巫女や祭祀王の像が登場する。その座像は、スツール(小椅子)上で片立て膝の平座像で腰掛けて見下ろす視点と独立した座像表現があるが、1期の印章図像に本格的な銘文がなく、スツールも特別な人物の席にとどまる。

2期(前3000年ー前2334年)は都市国家の時代で、メソポタミア南部を中心に都市毎に独立した国家と王権が相次いで発展し、特別な地位にある人物がもつ印章は、饗宴図や動物闘争図の主題のもと座像に銘文が加わる。

この2期の重要な座像表現は、前2600年頃のメソポタミア南部ウル王墓群から王妃プ・アビの銘文「Pu-abi,nin」がつき、饗宴図をもつ印章が遺体とともに出土した。王妃の座像は、座面より少し上に延びた背板に上半身を沿わせ正面向く姿勢で、他の人物より大きく表現した玉座の座像である。ただしここには、王権の象徴となる王冠、玉座を構成する基壇、足台といった付属するものがない。2期の座像表現は、1期のスツールより高い座面により玉座の過渡期というべき高い視点位置となっている。

3期(前2334ー2000年)は、王権が本格化しはじめた時代である。2期からの伝統をひきつぎルガル(Lugal)の称号でたたえられた王が自らを神と宣言し、王の称号、「強力な王、四方界の王」が一般化した。シュメール王名表に窺われる天から天下(地上)に下る王権(nam. lugal)の観念がこの時代の王と神の謁見図の印章と王の法典碑に本格化する。

代表的なウル第三王朝ウルナム王法典碑(前2100年頃)の二段目に玉座の神(左にニンガル、右にナンナ)は、女神を従えて王環を受け取る王の謁見図がある。王の手は、王杖(gidri)、頭に王冠(aga)を被り王権を象徴する玉座の神(王)が上半身を支える高い背板や肘当て、下肢を安定する足台が加わって威儀を正した正面向けに玉座(gi.š. gu. za)に倚座姿勢をとる。

3期の印章図像で玉座の特別な例は、神殿の門や階段状の建築様式を摸して、神殿前に玉座を設け、有翼の神殿の門を表現している。そこには神殿をして天に通じさせようとする建設者の意図を示している。基壇上に設けた玉座で正面に向く神(ないし王)の倚座姿勢は、

象徴性のみならず、足台や基壇が天に通じる階段となっていることを暗示する。だが前3千年紀後半にウル第三王朝の滅亡は、シュメール人の文明の終焉により群雄割拠の時代に入り、都市の中心にあり天を指向した神殿建築が都市とともに要塞化にむかう。

第3章 印章にみる玉座の「カタ」と「カタチ」

第3章は本論考のまとめである。筆者はメソポタミアで前3千年紀の玉座に関する研究から、玉座の「カタ」と「カタチ」の両要素が、神=王の一体観を中心に3期に揃ったと結論づける。すなわち、「カタ：姿勢」は自ら神と称した王権の頂点にたつ王が神として威儀をただして「敬天」の思想のもとに神の代理として、高いところから見下せる倚座姿勢をとる。玉座の「カタチ：形態」は天に通じる神殿を摸した。両要素は王権の拡大化とともに発展した。こうした玉座の「カタ」と「カタチ」は4期以降に充実期にむかい、とりわけ6期(前1000～500年)の新アッシリア帝国の玉座は、足台、基壇を常に備えた玉座になり、天に通じる階段の役目を意識した足台とともに玉座が天に向かう神殿のようにそびえ独立する玉座となり、以降、直接的、間接的に各地の玉座に影響を及ぼす。

本論考は、玉座の「カタ」と「カタチ」を通して、古代メソポタミアの王権思想と姿勢観とが不可分に結びついていたことを明らかにする。古代王権の統治原理は単に政治の仕組みだけでなく、玉座の形態とそこに座する姿勢観に託された象徴性にもあった。それは従来の王権論や政治史、あるいは美術史が看過してきた点でもある。

本論考の学問的意義は、まさにこの点にある。さらに本論考が有する社会的意義は、古代の姿勢観と物質文明観を考察し現代社会に生きる我々の期待する効率的な生活、経済的な物質文明の獲得の対極に位置する起居の文化的希少性と価値観を示す意義がある。